

## FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 鳩貝 耕一

所属/職名： 情報教育研究センター 教授

参加セミナー名： 大学コンソーシアム京都「学修支援を問う～何のために、何をどこまでやるべきか～」

セミナー参加日時/場所： 2015年2月28日～3月1日／同志社大学今出川校地 寒梅館（1日目）、良心館（2日目）

### ■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

#### シンポジウム（2月28日）

#### 大学でのリーダーシップ教育（立教大学経営学部 教授・リーダーシップ研究所 所長 日向野幹也）

氏は、立教大学経営学部におけるビジネス・リーダーシップ・プログラム（BLP）の立役者であり中心人物である。立教大学へ赴任した際に安請け合いしたことが、担任の始まりだということである。授業形態は、本学経済学部の「プロジェクトゼミ」を発展させたものと考えれば分かりやすい（[https://www.youtube.com/watch?v=LZDniIdzm\\_E](https://www.youtube.com/watch?v=LZDniIdzm_E)）。

最初の二年間は財源や教職員の割り当てがなく、うまく動き出すのかどうか教授会も半信半疑だったようであるが、2008年に教育GPの補助を受け、事務局の設置、助教の採用、SAの集合トレーニング、教員のアクションラーニング研修を開始した。

このプログラムの効果は絶大で、学部生の帰属意識が高くなり SAの応募者数は3倍の倍率である。学生団体が次々に出現し、ゼミもサイロ・蝸壺化していない（すなわち、学生どうしの横のつながりが強い）。文部科学省や日本学術振興会の評価も高く、経営学部の専門科目から全学対象科目へと昇格した。

このプログラムの全クラスがアクティブ・ラーニングやピアラーニングであり、他の専門ゼミで輪読でもやろうものなら、「先生、PBLやアクティブ・ラーニングは行わないのですか？」と学生のほうから質問が出る事態となっている。結果、必然的に専門ゼミのアクティブ・ラーニング化が進行した。

#### 同志社大学良心館ラーニング・コモンズにおける学習支援体制と現状（同志社大学学習支援・教育開発センター 助教 岡部晋典、准教授 浜島幸司）

同大学今出川校地に2013年4月に建設された「良心館」の二階三階にラーニング・コモンズが設置されている。良心館へは地下鉄今出川駅から地下道でつながっているため、雨に濡れることなく校舎に入ることができる。グループ・ディスカッションするための机や椅子も様々な形態のものが置かれており（本学CUBEにあるような「もの」が、たくさん置かれている）、ディスカッションの内容やその日の気分で「場所」を選ぶことができる。

多くの大学とは違い、ラーニング・コモンズと図書館は別の建物にあり離れている（発表者によると徒歩 1 分半程度である）。コンセプトは、「知的欲望開発空間」で 2,550 m<sup>2</sup> という日本最大級の床面積を誇っている。

運営主体は「学習支援・教育開発センター」であり、スタッフは 3 名のアカデミック・インストラクター（専任教員）、1 名の情報探索アシスタント、11 名の院生によるラーニング・アシスタント、学習支援コーディネーター、留学コーディネーターなどで構成され、多彩な顔ぶれによりサポートを行っている。

本学の教育学習支援体制を考える上で、大変参考になる発表であった。

### 学修支援なのか、学習支援なのか？—単位制とトランジションをどう折り合わせるか—（京都大学高等教育研究開発推進センター 大学院教育学研究科 教授 溝上慎一）

アクティブ・ラーニング界のカリスマと称される、京都大学の溝上慎一氏のご講演である。氏のウィットに富んだ解説は、いつ聞いても面白く、示唆に富んでいる。

今回は、2012 年 8 月に文部科学省の中央教育審議会が出した答申、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—」（氏は「質的転換答申」と略していた）をネタ（肴）にして、「学修」と「学習」の違いに切り込んだ講演であった。

文部科学省（政府）が公示する文書は、いつも分かりにくく書かれている。「世間からの批判や糾弾を恐れて、あえて分かりにくい文章にしているのではないか。」と私自身、勘ぐっているが、この答申についても同様で、用語の定義や使われかたが相当あいまいである。たまたま、事前にこの答申を子細に読み込んでいたので、氏の主張には一言一言うなずいていた。

大学での所定の単位をとるための「学修」時間のなかにアクティブ・ラーニングを導入するのであれば、対して、所定の学修内容を超える、要するに自身の思考や興味からくるさらに発展した「学習」を**プロアクティブ・ラーニング**と呼ぶべきであろうというのが、氏の主張である。「学習」が学生の知性や理性を育む要素であることについては同感であり、今後、大学での「学びの転換」を押し進めるにあたっては、常に頭の片隅においておくべきものだと感じた。

私は今まで常々、

学習 ⊂ 学修

と考えていたが、

学修 ⊂ 学習

なのだという理解を今回得ることができた。「教育**学修**支援センター」ではなく、「教育**学習**支援センター」という命名で良かったのだとホッとした次第である。

## 【第 9 分科会】学び合うコミュニティをつくる～学修支援とピア・サポート～ (3月1日)

2日目の分科会は、第14分科会まである壮大なものであったが、学習支援にはそれだけ多種多様の課題があり、それらを解決しながら進めていかねばならないということもできよう。第9分科会では、学生どうしが学び合うために、学生どうしのピア・サポートをどう育んでいくのかについて、先行事例が3つ紹介された。

- 初年次教育とピア・サポート（立命館大学 産業社会学部 准教授 景井充）  
産業社会学部では、早くからピア・サポートを導入している。しかしながら、昨今は入学生の「生徒」化が進んでいる。当該学部は「パラダイス産社」と呼ばれており、立命館大学の中でも偏差値が低いほうで、初年次学生たちが学問を「分からない・知らない」で通すようである。そのような学習態度を転換するため、初年次ピア・サポートを導入して「自走する学生」を育てることを目標としている。自治会組織である「エンター団」は遊び仲間集団と化しつつあるが、もう一つの ES (Educational Supporter) では、今後の学習支援について教員とともに模索しているところである。
- 専門教育におけるピア・サポート（獨協大学 外国語学部 教授 北野収）  
同教授が実施している、大講義室でのワークショップ、文献輪読、卒論仕上げ、の3つのピア・サポート事例についての紹介であった。  
100～200名の大講義室での教室内ワークショップ（1コマのみ）では、ランダムに8～10グループを作り、司会と書記を決め、事前に読んできた「ケースで学ぶ国際開発」と事前のレポート課題を持ち寄ってディスカッションを行う。  
ゼミにおける文献輪読では、30名の3、4回生合同で日本語論文の輪読を行っている。ゼミ直前の昼休みに4回生が集まり、ゼミ長を中心にグループ分けやファシリテーターを決めておく。事前の質問事項に関し、4回生がリードしながら全体で共有し、最後にグループごとに発表を行う。3回生には「苦痛なことをやらされている」感が強いが、4回生には後輩に対する責任感や先輩としてのプライドが生まれている。  
卒論仕上げに関しては、事前に提出した原稿に対し、他の学生がコメントシートに指摘事項を書き込む。サブゼミでは指摘内容を共有し、どう反映するのか本人が簡潔に話す。指摘内容が的確でない場合、教員が介入する。結果、クリティカルリーディング、論文作法が身につく、「学びの共同体」が継続的に自主運営されるようになった。
- 関西大学におけるピア・サポート活動の取組み（関西大学 学生サービス事務局 職員 吉田えつ子）  
関西大学では、学生センターのボランティア活動支援グループが複数のピア・コミュニティを立ち上げている。コミュニティは課外活動団体の扱いで、スポーツ、ピアラーニング、悩み相談、留学生支援、図書館サポート、広報、ITサポート、などがある。主に職員がサポートしているため、ピアサポーターの安定的確保、支援体制の安定的維持、関わる人のモチベーションアップなどの課題をかかえている。